

【姜 尚中 氏】

「リスク社会の絆といのち」

「変えられるもの」「変えられないもの」

・今回、「リスク社会の絆といのち」という演題でお話しいただきましたが、改めて、私たちの社会の現実と、リスクにどう向き合うかについてお聞かせください

例えば病院に行って、「あなたはこういう病気です」と言われたとします。そこで、治療についての説明などを受けます。医者は、患者の心身の負担や薬の副作用などといったリスクをいかに低減しながら治療を進めていくか、という話をしなければならないのに、患者は専門的な知識を持っていないためになかなか理解が出来ない。とはいえ、医者は医療の専門家ですから、患者は信頼して命を預けるわけです。

私たちは、専門家やエキスパートへの信頼により動いています。物事が高度になればなるほど、専門家に頼らざるを得なくなる。

リスクは、人間の力では「変えられるもの」と「変えられないもの」とに分かれます。ですが、予備知識を持たない人にはその見分けがつかず、「これはこう出来たはずなのに、どうしてしていないのか」という話になってくる。ですから今後は、一般の人でも分かるように説明が出来る人や言葉が必要になってくるのではないのでしょうか。そうすれば、何かリスクが起きた場合にユーザーはある程度納得することが出来る。逆にユーザーも、前もって受けた説明をもとに、起こりうるリスクについて考えていかなければならないのだと思っています。

しかし、リスクを最小限に抑えるために作られたシステムが同時にリスクを生み出し、そのリスクをより小さくするためにまた新しいシステムを生み出し、それがまたリスクを生み出すという、いわばイタチごっこを続けていかなければならない。そしてこのリスクの僅か1ミリの違いによって大きなダメージを受け、尊いいのちが失われてしまう。これは非常に脆弱な、私たちの社会の現実なのです。

そういった中で、3月11日に発生した東日本大震災のように、人間の想像を超えた自然災害と人災がミックスされた大災害は、多くの人々の尊いいのちを奪った、変えることの出来ない恐ろしい現実として、私たちに覆いかぶさってきました。

私たちは今、「どうしても変えられないもの」、「二度とあってほしくないもの」をどうやって受け入れていけば良いかという問題に直面しています。

・変えられないものをどう受け入れていけばよいか、という答えは一人一人違ってくると思いますが、受け入れられるきっかけというものはあるのでしょうか

あります。生きていく中で何かにつまずくと、常に振り出しに戻ってしまう。だから歳月が経っても解消されない。解消していくには、起きた物事を語り継ぐ、受け継ぐということが必要なんです。僕も時間がかかったけれど、自分が語り継ぎ、それを受け継ぐ人がいれば非常に慰められる。何年経ったからおしまいというものではなくて、語り継ぐことを続けていく。話すことを聴く人、普通はカウンセラーであったりしますが、そうではなく、傍らにいて聴いてくれる人を見出すことが出来ればものすごく違ってきます。変えられないことが深いところにあることで、自分を支えられているという面もありますが、違う支えを自分で見つけ出していかなければならないのだと思います。

・講演の中で、東日本大震災の被害を数字で表す報道に、違和感を持たれたというお話をされていました。被災地で瓦礫と称されるもの一つ一つには、生きていた人々の痕跡、人間のしるしがはっきりと遺されていました。それを前にしたとき、統計的な数字でカウントされていく報道に強い違和感を持たざるをえなかったのです。

東日本大震災も、10年後は統計上の数字で語られると思います。しかし、人間の記憶は数で表されると忘れるのが早い。その後には、「そういうものか」と刻まれていってしまう。

どういった表現で伝えられるかという、本来は文学なんです。戦争を経た後の戦争文学が出てくることと同じように、震災を表すことの出来る金字塔のような文学の主人公がいるだけで変わってくる。

日々生きていくことが精一杯という人が多い中でも、ある一つの具体的な人格を持った誰かが物語の中

に生きていると、ものすごく違うと思うんです。

阪神淡路大震災では、そういった主人公が創られなかった。震災後 19 年と言われていながら、関西地区以外では急激に忘れられているんです。

僕が東日本大震災の被災地へ入ったのは、震災発生から 2 週間後でした。東日本大震災といっても、仙台や三陸、福島ではかなり被害の状況が違います。それぞれの地域の中でも被害の度合いが全然違って、非常に個別化されている。そこに原発事故も加わって、更に復興が難しい状態になっています。

ただ、せめて仮設住宅から移れるようにということは出来ますから、いろんな支援をしていくことが必要です。

3 年という年月は節目とされ、通過儀礼のように過ぎていってしまいがちです。被災地に貢献している団体が、今後も継続して支援をしていく。そういったメッセージを発信していただけても違ってくると思います。

「語り継ぐ、受け継ぐ」

・最後に、先生にとって「いのち」とはどのようなものかお聞かせください

僕は息子がいなくなって、血の流れからすれば止まってしまったわけですね。

今日のセミナーで「語り継ぐ、受け継ぐ」という話をしましたが、今は、血縁でなくても自分の考えの DNA のようなものを誰かが継承していけば、それは続いているんじゃないかと思うようになりました。

『心』という本を書いて良かったと思うことは、自分の書いたものをたくさんの人が読んで、語り継いでくれること。多分僕が亡くなった後も読んでくれる人がいて、僕の考えはその人たちに繋がっていく。

そして、文字に残さない人は自分の友人や傍らにいる人に思いの丈を語り、その思いは受け取った人に繋がっていく。だから「いのち」というのは「繋がっていく」ということなのではないでしょうか。

ある自分の考え方を受け取って、それを伝えてくれる人がいればよい。受け継ぎ伝える、流れ連なっているということが「いのち」なのではないでしょうか。